

貧女が福分を得る話

——『日本靈異記』中巻第三四縁について——

永田典子

序

『日本靈異記』中巻「孤嬢女憑」敬観音銅像「示奇表得」現報「縁第卅四」（以下「本縁」という）は、身寄りのない貧女が観音像に祈って福分を得る話で、その大要は次の如くである。

奈良右京の殖槻寺の近くに一人のみなしの女がいた。父母存命中は大袈裟福で、観音像を塑造し、家から離れた所に仏殿を建て、像を安置して供養した。聖徳天皇の世に父母が死ぬと、奴婢は逃げ去り、牛馬は死に、財産もなくなってしまった。女は観音像に福分を祈って泣くばかりであった。その頃、同じ里にやもめの裕福な男がいた。男は女を見初め、仲人を通じて結婚を申し込むが、貧乏で着る物がないからと断られた。それで

も男は諦めず、強引に女の家に行き、女と交わった。翌日は一日中、雨が降り続き、男は帰ることもできず、三日間逗留した。男が食を乞うと、女は食べる物がないので、観音像に財産を恵んでくれるように祈った。夕方、隣家の乳母が主人の言い付けで大瓶に百味の飲食と立派な椀、皿を納めて持って来た。女は喜び、着ていた衣を脱いで礼に差し出すと、乳母はこれを着て帰った。次の日、男は自宅に戻ると、衣と酒を作るようにと絹十疋、米十俵を女に送った。女が隣家に礼を言いに行くと、主人も乳母も知らないと言った。家に帰って仏殿に入ると、主人に与えた衣が観音像に着せてあった。そこで女は因果を信じ、観音像を一層つつしんで敬った。それ以後は以前のように裕福になり、夫婦とも天寿を全うして長生きした。

『靈異記』には貧女が福分を得る話がこの他にも三話(中14・中28・中42)あるが、本縁はこれらに比して類話が多く、『今昔物語集』一六の8、金沢文庫本『観音利益集』四〇、『元亨釈書』二九番東京女の条がある。また『今昔』一六の7は内容的には相違するが、テーマや構成は本縁とほぼ一致する。この話の類話としては『古本説話集』下54、七冊本『宝物集』三(九冊本『宝物集』四)の金前の観音説話、『宇治拾遺物語』一〇八がある。『古本説話集』下48もその類話と見做されるが、男が雨に降り込められて女の家に逗留する点が本縁に類似する。このように、本縁は後続の観音靈驗譚に關係説話が多く、その影響力は大きいと言えるが、この話自体は如何に形成されたのであろうか。小稿ではこの問題について若干の考察を試みたい。

(一)

『靈異記』の観音靈驗譚の特徴の一つに示現思想が挙げられる。観音が示現の能力を有することは諸経に説かれているが、その根本は主として『観音經』の三十三身示現の説に発する。三十三身は必ずしも数を限ったのではなく、観音があらゆる種類の衆生に応じて化身することを意味し、その示現の徳用を示

す。

『靈異記』において観音が衆生の境遇にしたがって変化自在に顕現することを語る説話としては、本縁以外に上6・20・30、中17・42、下12・13・38がある。このうち中42と下12に關しては他の信仰による類話がある。

中28 極窮女於三尺迦文六仏願福分以得大富縁
大福縁

中42 極窮女戀敬千手觀音像願福分以得大明眼縁
下11 二目盲女人婦敬萊師仏木像以現得明眼縁

伊藤孝子氏も指摘するように、I・IIは各々主人公の境遇と祈願内容、感応が共通するが、祈願対象の相違により、その感応の示される方法が異なる。即ち、中42・下12では観音の化身が現れて祈願を成就させるが、中28・下11においては仏の化身は登場せず、前者では人知れず家の前に錢四貫が置かれる、後者では仏像の胸から出る脂を食うことにより目が開くというように、直接的な願望成就となっている。

右の例において、示現思想は観音の感応方法の特徴づけ、その感応を中心とする説話構成は靈驗譚として一つの話型をなしている。本縁もその話型を踏まえた話であるが、この話では特

に観音が示現したことを証明する物件がある。主人公が隣家の乳母に礼にやった衣がそれで、後にそれが観音像に掛かっているのを見た主人公は観音の感応を確認し、ますますその像を恭敬したという。こうした物件は中42にもあり、主人公に錢百貫の入った皮櫃を預けに来た妹の足に馬糞が染みついており、後に千手観音の足にも馬糞がついていたとする。この話の主人公は海使女という名の、九人の子を持つ女で、極貧の境遇であり、本書の観音靈驗譚中、本縁との類縁性が最も高い説話である。しかし、主人公の直面する窮地、それを救済する感応、示現を証明する物件において、本縁は中42よりも吉祥天女信仰による中14のほうに類似する。駒木敏氏はこの二話から、

(A) 貧しい女が逼迫して仏像に財福を願う。

(B) 女人の家に客人のある由を伝聞した知人が、食物を持ち来たる。女人は衣裳をお礼に与える。

(C) 後日、その衣裳によって知人は仏の化現であったことが判明する。

(D) 結び

という話型を抽出できるとし、話型を持つ話群について、「それらは民間布教を背景に構成され、かつ同質的な集団によって管理伝承されたことによる」と述べている。この件に関して、

本縁と中14の主人公の屬性に注目したい。

中14の主人公は子を持つ女王、本縁の主人公は身寄りのない娘で、両者の屬性は必ずしも同一ではない。だが、中14の本文中の「但此女王 独未_レ設_レ食 備_レ食無_レ便 大恥_レ貧報」、本縁の「莫_レ令_レ受_レ恥 我_レ急_レ施_レ財」という言葉から窺われるように、この二人は貧乏、若しくはそれによって客人を鑿_レ感_レできないことに対して「恥」を感じていることで共通する。これは同じ貧女譚である中28・中42には認められないことである。この「恥」は、極貧状態にありながらも客人への鑿_レ感_レを断り切れない主人公の心理の説明となるが、それは主人公の出自に関係するのではないかと考えられる。

中28・中42の貧女の素性については詳述されていないが、恐らく一般的な庶民であろう。これに対して、零落しているとは言え、中14の主人公は皇族であり、本縁の主人公は、多くの家や倉を保有し、奴婢がいて牛馬を飼うという裕福な家に生まれ育った娘であるから、二人の出自は社会的に上層に位置する階層ということになる。中14の吉祥天女像を祀る服部堂は、『日本歴史地名大系』によれば、元興寺の小塔院吉祥堂のこと²⁷で、上3において元興寺の田に水を引くの諸王達が妨害していることから、服部堂の周辺に皇族が居住していたことが窺われる。

また本縁において、主人公に求婚する男も隣家も富豪であったというから、殖槻寺の周辺に豪族層の居宅のあったことが察せられる。中14・本縁の伝承管理には、当然仏教者の関与があったであろうが、こうした皇族や豪族層の人々が中14、本縁の各各を在地の説話として、その管理に与っていたことは想像に難くない。皇族と豪族とは厳密な意味で同質とは言えないが、説話の管理者としては、社会的に上層に位置する人間、主人公の抱く「恥」という心情の理解できる人間であることで類似する。このことにおいて、中14と本縁とは同質的な集団によって伝承管理された説話と言えよう。

(二)

本縁の形成に関しては、既に駒木敏氏の論考がある。氏は前項で引用した話型をもとに、本縁は貧しい女人の願ひ(A部)に対して観音が感応する(B部)のがもともとの骨組みであり、「存身无便」「孤嬾」という主人公の属性から、「里有_三富者「妻死而嫁」である男性が設定され、この二人を軸とする葛藤が更に副次的なテーマを削り上げていたのであって、この部分は話の形成過程からすると後次的発展であるとす_三る。

これに対して、小稿では一つの試みとして、本縁は身寄りのない貧女と富豪な男性との結婚を語るのが原初的な形であり、中14との間に認められる話型の部分は、その発展段階において形成されたと考える。その考察の前に、まず本縁における観音信仰について述べたい。

『靈異記』において、観音信仰に関係する説話は本縁を含めて二二例(上6・15・17・18・20・30・31、中11・17・26・34・36・37・42、下3・7・12・13・14・30・34・38)ある。その信仰が話の核心に触れないものや、他の仏菩薩信仰と関係する話を除いても十数例あり、釈迦仏(四例)・薬師仏(二例)・弥勒菩薩(五例)・妙見菩薩(三例)・吉祥天女(二例)・執金剛神(二例)・十二薬叉大将(二例)に比べて観音の靈験譚は断然多く、当時の観音信仰の隆盛を窺わしめる。それらの話は概して招福除災的な現世利益信仰に支えられており、本縁の「聞_三観音菩薩者所_レ願能与_二」という言葉はそのことを端的に示している。だが、利己的な衆生救済を希求する観音信仰も、本縁にあっては追善的性格を帯びているのではあるまいか。

本縁の観音像は家から離れた場所に建てられた仏殿に安置されており、その家の守護仏として供養されていたようであるが、当時の大家では祖先の霊を祀る所が母屋とは別棟になっていた

ことが下27から察せられる。本縁ではそうした霊所に観音像を安置して仏殿とし、亡き両親の霊もそこに祀られたと推想される。

速水侑氏の論考によれば、飛鳥・白鳳期における観音信仰は追善の性格を基調とする法華経的観音信仰が主流をなしていたが、白鳳末期から密教的变化観音の思想が流入すると共にその信仰は急激な発達を遂げ、奈良朝においては密教的現世利益信仰が主流を占めるようになったという。「靈異記」において亡者追善供養は「奉_レ為_レ母_レ写_レ法華経_二」(中15)、「為_レ彼死妻_一奉_レ写_レ法花経_一」講説供養 追_レ贈福聚 願_レ赦彼苦_二」(下9)、「妻子哭愁 願_レ繪観音像_一 写_レ経追_レ贈福力_二」(下13)、「為_レ古磨_一 奉_レ写_レ法花経一部_二」(下35)、「奉_レ写_レ法花経一部_一 恭敬供養 追_レ救彼靈苦_二也」(下37)とあるように、専ら「法華経」の写経によっているが、下13で観音像を函絵したというのは、「観音経」に依拠する利益信仰とは異質の観音信仰を呈している。即ち、追善の性格を基調とする法華経的観音信仰であり、この話は奈良期若しくは平安初期におけるその信仰の存続を示していると言えよう。

本縁の場合、観音像は両親の塑造したものであるから、主人公が観音像と彼等の霊を共に供養したことは充分考えられる。

その供養は下13の如き観音信仰によるもので、主人公は本来、亡き両親の霊を追善供養し、その功德によって現状から救われんことを祈念したのであり、もとは『法華経』の写経のことも語られていたのかも知れない。だが、「聞_レ観音菩薩者所_レ願能_レ与_二」という言葉や観音の示現によって示されるように、当時における観音信仰の主流をなす招福除災的な現世利益信仰が色濃く反映され、そのために追善の性格が薄れてしまったと推測されるのである。

(三)

本縁は、男が主人公の家にやって来て、雨に降り込められて逗留するのを境として、前段と後段の二つに大きく分けることができる。

観音は後段の「冥令_レ受_レ恥 我_レ富施_レ財」という祈願に応じて示現するのであり、主人公の零落ぶりや男からの求婚を叙述する前段は、言わば後段の導入部となっている。しかし、主人公が福分を得たとする結末は、前段での「我乃_一子而无_レ父母_一 孤唯_レ独居 亡_レ財貧_レ家 存_レ身无_レ便 願_レ我施_レ福 早_レ脱 急施_一」という祈願に合致する。両親を亡くし、財産も失ってしまった

った主人公の状況からすれば、福分を求めるのが後段での祈願よりも本来的である。本縁はその祈願によって福分を得るといふ単純な構造を基盤とし、それに立脚して観音の示現の誘因となる場面を展開させ靈験を示すという重層構造をなしているのではあるまいか。換言すれば、本縁の形成過程の初期段階では、前段の祈願とそれへの感応を語る靈験譚で、主人公が貧しき故に直面する窮地に観音が示現するというのは、靈験譚としての劇的效果を意図した展開と考えられる。

前段での祈願は、中28・中42の主人公が貧窮生活から逃れべく救いを求める願いと同様のものであるが、相違するのは、これら二話では仏の靈験によって財貨が授けられるのに対して、本縁では観音による財貨の施与が行われていない点である。だが、主人公の夫となった男は富豪者であり、主人公が「本大富」脱「飢無愁」という状態になったのは彼との生活においてであることから、この男と結婚できたことは財貨の施与に相当する感応と言える。よって、本縁の基底には、貧女を幸福な生活に導く男性との結婚が因果応報の理念の具象としてあるのではないかと推想される。

上31は、御手代東人という男が観音に帰依信仰し、大福徳を得る話で、本縁とは多少趣を異にするが、現報の大福徳が結婚

によって得た、妻の家の財産である点に注目される。また、本縁のように観音が示現し、貧女のために男への誓応を尺度する『今昔』一六の7、『宇治拾遺物語』一〇八、『古本説話集』下54では、貧女の身の上を気の毒に思う故、頼りになる男を呼びにやっただという夢告がある。これによって貧女と男との結婚が観音の靈験であることは明らかである。更にまた、『今昔』一六の9、『長谷寺観音験記』下27、『閑居友』下5、『沙石集』二の4、『三國伝記』一の15でも、貧女は観音に祈願することにより、身分ある男性に見初められて妻に迎えられることとなる。『今昔』一六の33は、京の貧女が清水観音の夢告で八坂寺の塔に住む盜賊と契り、彼から貰った絹布を元手に幸福な生活を築いた話であり、これに続く一六の34は、無縁の若い僧が同じく清水観音の計らいにより若い女と結ばれ、女が乞食の頭目の娘であったため彼も乞食となり、生活の資を得て何の不自由なく暮らしたという話で、両話とも観音信仰による致福譚であるが、やはり靈験は男女の邂逅、結婚に示されている。

高群逸枝氏によれば、身寄りのない者や貧しい者は、律令下では賑給制によって救済されるが、平安期になるとそうした人々の存在が目立ち始めたようで、貞観二年に右大臣藤原良相が居宅のない一族の婦女を收容する施設として崇親院を私邸内に

設置したことは、当時、女性の没落が頻出したことを窺わしめる。貧女でも暮らしを立ててゆく術を心得ている者や崇親院等の施設に收容されている者はよいが、そうでない者はただ路頭に迷うばかりで、他者の援助を待つしかない。殊に身寄りのない若い娘であれば、生活の保障をしてくれる男性の出現は切実な願いと言えよう。本縁は、そうした女性達の現実的な苦悩を越えるべく要求が観音の慈悲によって実現される話として形成された靈験譚で、財力ある男性からの求婚は直接的な願望成就であり、観音の靈験の第一義はここにあると考えられるのである。

(四)

本縁の後段において、観音は主人公の祈願に応じて男への饗応を支度するが、この饗応という場面設定には一体どのような意味があるのであろうか。主人公が食べ物が無いのにも関わらず、男の「我飢 賜飯」という要求を断れなかったのは、既述の如く、恥をかきたくないとする心理によると解されるが、他面、饗応すること自体に催すべく意義があったことにもより、その意義に基づいて、主人公の直面する窮地として客人への饗応という場面が設定されたと推想される。このことに関して、

本縁に先立って中14での饗応について見てみたい。

中14では王宗二三人が心を合わせて順に宴席を設けることになっており、貧しい女王にとって、他の王宗の宴席に出席しながら自分だけ設けることのできないのは何とも心苦しいことであらう。だが、仮に饗応できなかった時のことを想定すると、饗応を断れなかったのはそうした心情ばかりとは言えない。

この話の宴席は単なる会食の席ではなく、皇族という同族意識を持つ集団の社交の場であり、その背後には、食事を共にすることで互いの関係を親密にしようとする共食の思想があるのであろう。宴席を設けるといふのは、そうした集団の一員であることを保証するが、もし設けられなかったならば、以後の宴席からはずされてしまい、仲間との関係が絶えることになりかねない。そうした事態を危惧する心情もまた饗応を断れなかった理由ではあるまいか。子供を抱えた女王が貧しいながらも王宗の仲間に入ったのは、食事が目的ではなく、生活の保障を得るのに同族の集団に身を置く必要があったからと推測される。それだからこそ、宴席を設けられないことは女王にとって窮地になり得るのであり、吉祥天女は彼等との関係を維持すべく饗応を催させようと示現したのであろう。

それでは本縁の場合はどうであらうか。

高群逸枝氏の日本婚姻史上における形態区分によると、大化前後頃から平安中期頃までは前婚取婚で、その形態は妻問婚から純婚取婚に移る過渡的な様相を呈しており、妻問婚が氏族共同体を母胎としたのに対して、崩壊した共同体の中の母子家族を根拠とし、母親が背後に出現して監視し、或いは黙認し、事後的承認を与える等の役割を受け持つという現象があらわれるといふ。

本縁では「通_レ媒作_レ伉儷」とあり、妻問婚の形態をとるが、「聖武天皇御世」という時代若しくは『靈異記』の編纂年代から見て、それは過渡期における前代の遺存と見做される。但し、女性側の両親は亡くなっているため、その承認を得る必要はない。女が男に身を許した時点において二人の結婚は成立したことになる、本文では同衾以後の主人公のことをそれまでの「娘」に加え「妻」とも表記し、男についても「夫」の語が用いられている。従って、本縁では贅する者と贅せられる者とは既に贅応以前に緊密な関係にあることになる。それは男のかなり強引な求婚によって生じた関係であるから、彼を贅しないからと言って主人公を見捨てるようなことはないはずである。従って、この話の贅応には中14におけるような意義が認められないことになるが、果してそうなのであろうか。

ところで、『今昔』一六の8は本縁の類話としては相違点が多いが、この話で注目されるのは、隣の郡の郡司の息子が妻を求めに京に上る途次で主人公の家に立ち寄ったとする点である。この男は、沼河比売を訪ねる八千矛神や、伊須奈余理比売に求婚する神武天皇の如き、理想の女性を探し求めて旅をする古代の男性の姿を剪貼させるが、その一方、主人公である女性の側から見れば、幸福をもたらす旅の者として描かれていることになり、彼を贅することは、来訪者への贅応と捉えることもできる。従って、この話で主人公が食べ物が無いにも関わらず、何とか男に食事を出そうとする背後には、『常陸國風土記』筑波郡の条に伝えられる神巡幸譚、『備後國風土記』逸文(『歌日本紀』七所引)に記される疫禍国社の縁起譚、伝説の弘法清水譚等に認められる外者接待の思想があるのかも知れない。

この『今昔』の話に対して、本縁での男は主人公と同じ里に住み、初めから彼女を自当てに妻問いをしている。主人公にとってこの男は確かに訪問者には違いないが、この二人が同じ里に住むという設定から、外者接待思想との関係については俄には判断しかねる。但し、男が贅せられたのが主人公の家に逗留して三日目であったことから、その贅応には婚姻儀礼的な意味があるのではないかと推想される。

(五)

周知の如く、所願の中心をなす儀式として「三日餅」がある。これは平安中期の物語や日記等に多く散見され、『落窪物語』二での兵部少輔と四の君との婚姻では「三日のまうけ」、『後拾遺和歌集』二〇の藤原実方の歌では「みかのよのもちひ」、『栄花物語』一三の小一条院と御匣殿との婚姻では「餅の夜」等とも称する。

高群氏の論考によれば、平安中期になると所願よりも新枕の日の儀式のほうが重視され、その結果「三日餅」の日は限定されず便宜にしたがって決められるようになるが、本来はその名の通り新枕の三日目に行われ、忍び婚で寝ている現場を女の家者が暴露して男に餅を食べさせる儀式で、奈良時代の頃、農民の間で生まれたのであろうという⁽⁹⁾。氏も指摘するように、この儀式は『記紀』の「黄泉戸喫(浪泉之庵)」に認められる古代の共食の思想に基づいており、男はそれが済むと女の家族の一員と見做され、忍び通りをやめ、公然と通ったり、同居したりすることができ⁽¹⁰⁾る。また氏の説によると、こうした所願を「新枕の三日目に行く」というのも古代人の教に対する觀念に基づ

いており、「三日」というのは数えられない期間の象徴で、男が所願によって家族の一員となるまでの、別族の人として生き続けた期間を表すとい⁽¹¹⁾う。

本縁の類話中、『観音利益集』四〇において男を娶するのはやはり逗留三日目であるが、『今昔』一六の8、「元亨秋書」二九の諸楽京女の条では男がやって来た翌日のこととする。前者の場合、二日目までは貯えていた食料でもてなしていたとするかも知れないが、こうした時間的空白を置かず、後者のように男と結ばれて初めての食事を交華に饗したほうが劇的で、時間の流れに無理がない。

本縁においてこのような展開にせずに空白の時間を設け、男の逗留期間を三日とするのは、高群氏の説く「三日餅」の三日と同様の觀念に基づき、男がまだ客人扱いにあることを示すのであろう。本縁では男の食べるものは餅ではなく百味の飲食であり、妻である主人公自身によって饗せられる点が「三日餅」と相違する。だが、その饗応には「三日餅」に類する意義が内在し、男は饗応を受けることによって客人の立場から正式の夫へと昇格すると考えられる。本文中男を「夫」と表記するのが饗応の場面以降であるのは、このことと無関係ではあるまい。

ここで一つの憶説を述べるならば、饗応の絢爛たる様も婚姻

儀礼に関係あるのではあるまいか。このことに関しては「百取机代物」に注目したい。

『日本書紀』によれば、保食神が口から出した様々な食物を百机に載せ、月夜見尊に饗せんとしたとあるが、百取机代物が婚姻に関わる例もある。例えば邇邇彥命と木花之佐久夜毘売、火遠理命と豊玉毘売との結婚がそれである。前者については『古事記』によると、大山津見神はその結婚に際し、毘売の姉を副えて百取机代物を献上したという。これが食物であることは『日本書紀』一書に「百取飲食」と記されていることから察せられる。後者については『古事記』によると、綿津見神は命に百取机代物を具え饗し、毘売を差し上げたという。また同書によると、雄略天皇の召しを待ちながら老いさらばえた引田部赤猪子は百取机代物を携えて参内したという。赤猪子のこの行為は、右の例のように百取机代物が婚姻に関わるものであり、殊に女性側の正式の承諾を意味することによるのであろう。赤猪子はそれを献上することで、召しの言葉を信じ続けた心を示そうとしたのである。

本縁において、男は主人公の貧しさを承知の上で求婚しているのであるから、彼が「我飢、賜_レ飯」と言ったのは、ごく日常的な食事を要求したはずである。そうした食事で主人公の

体面は充分保たれたであろうに、観音の用意したものは、美味芬馥たる百味の飲食と豪華な食器類という、言わば非日常的な食事である。このように男が所望以上の素晴らしい饗応を受けたことは、右の「百取机代物」について確認される古代の婚儀を踏まえてのことと推想される。

以上のことより、本縁の饗応は主人公と男との同食以後に行われているものの、その婚姻の正式な成立を示すのであり、饗する者と饗せられる者との結び付きを確実なものにする意味においては、中14での饗応と同様の意義を持つと考えられる。

なお、中14では王宗が女王に種々の品を贈って礼をするが、本縁で男が主人公に絹と米を贈ったのは礼としてではなく、彼女との実質的な夫婦生活を始めるためであらう。古代から織縫や造酒は主婦の重要な労働である。男が絹、米を贈る時に「絹_ニ縫_ニ衣被_ニ、米_ニ急_ニ作_ニ酒」と言ったのは、まさに主婦としての仕事を課しているのであって、主人公から正式の承諾を得たことによつて、一時的な恋愛関係ではなく、彼女と以後も末永く夫婦生活を営もうとする意の表明として、絹や米を贈ったのである。

(六)

最後に殖槻寺について触れておきたい。

この寺は『日本輿地通志畿内部』大和国添下郡の条に「植槻道場 在郡山ノ東北植槻八幡祠ノ傍ニ観音堂一宇(後略)」とあるが現存せず、寺跡は現在の和和郡山市植槻町北田中付近と推定されている。『大日本地名辞書』にはこの寺について「郡山観音寺蓋是なり、僧正智通之を開く、天武朝の比なり(後略)」とある。だが、『日本輿地通志畿内部』大和国添下郡の村里に「観音寺」という地名が挙げられていることから、智通建立による観音寺はその辺りに位置していたと察せられ、殖槻寺と同一視することは難しい。

また、殖槻寺は建法寺とも称され、藤原仲麻呂の仏教活動の一環として多数の經典の奉請されたことが、福山敏男氏によって指摘されている。『三宝絵詞』下によれば、維摩会を再興した不比等は場所を山階の陶原の家から法光寺、殖槻寺、興福寺に移して催したというから、殖槻寺は藤原氏の氏寺である興福寺の前身的存在と言え、仲麻呂や不比等をはじめとする藤原氏の庇護のもとにその勢力を伸長させたのであろう。

この寺は、『今昔』一六の8では観音像の安置場所になっているが、本縁では説話の舞台の所在を示す指標となっている。『靈異記』にはそうした例としては上1の豊浦寺、上4の法林寺、上34の私部寺、下5の井上寺がある。こうした用い方をされる寺はある程度の知名度があるはずで、殖槻寺は右に述べたように、藤原仲麻呂、不比等に關係深い寺として、あまねく知られていたと推想される。

この寺の名が出されていることは、また景戒の説話入手経路を示唆するとも考えられる。

殖槻寺は、恐らく在地の豪族達との諸交渉によって本縁の原話を入手し、その伝承管理に与っていたであろう。この寺は天平勝宝五年に葉師寺に經典を貸しており、時代は下るが、長和四年の「葉師寺縁起」によると、長保五年にこの寺の鐘が葉師寺の鐘樓に移されたこととあるから、両寺は浅からぬ關係にあり、僧の往来のあつたことはほぼ間違いない。よって、黒沢幸三氏も指摘するように、景戒は葉師寺を修行と活動の場にしていた頃、殖槻寺と葉師寺との交流のもとで本縁の原話を入手したのではないかと推測される。或いは、殖槻寺が興福寺の前身的存在としての性格を持つことから、殖槻寺から直接にはなく、興福寺を介在させ、他の興福寺關係説話と共に手に入れた

のかも知れない。

結

小稿では『雷異記』中34の形成問題に関する試みとして、主人公の属性を考慮し、観音の靈験による結婚成就を基盤に形成されたと考えた。このように解することにより、男からの求婚は観音の靈験となり、前段だけでも一つの靈験譚になり得る。これに続く後段は中14と同一の話型になっており、これも単独で一つの靈験譚になり得る。但し、両段は一直線上に個々に並んでいくのではない。主人公の祈願に応じて観音が男を娶する支度をするという後段の展開は、その誓応が婚姻儀礼に関係することから、前段での、主人公の結婚を成就させる靈験を基調として発展したものと考えられる。従って、後段は中14と同じ話型になっているが、前段と緊密な連関を有して形成されたのであり、本縁は両段のこうした関係によって統一ある靈験譚になっていると言えよう。

本縁を考察するには、本来ならば類話の中で問題点の最も多い『今昔』一六の8を更に取り上げて比較を行うべきであろうが、小稿では紙面の都合で差し控えた。両話の間にある諸問題

に關しては稿を改めて論じたい。

注 『日本雷異記』の本文引用は日本古典文学大系『日本雷異記』（遠藤嘉基・春日和男校注、岩波書店）による。但し、底本の破損箇所、誤字・脱字と推定される箇所は校異によって改訂した。

(1) 『妙法蓮華経』卷第八觀世音菩薩普門品第二十五。

(2) 伊藤孝子『日本雷異記』の『観音説話』（『仏教文学』第三号）。

(3) 駒木敏『古代文学と民話の方法』（笠間書院）一一八頁。

(4) 『日本歴史地名大系第三〇巻 奈良県の地名』（平凡社）「小塔院」の項参照。

(5) 駒木敏 前掲書。

(6) 速水侑『観音信仰』（鳩書房）。

(7) 高群逸枝『招婿婚の研究』（全集第二巻 理論社）。

(8) 高群逸枝 前掲書。

(9) 高群逸枝 前掲書。

(10) 高群逸枝 前掲書。

(11) 高群逸枝 前掲書。

(12) 『日本歴史地名大系第三〇巻 奈良県の地名』（平凡社）「殖槻寺跡」の項参照。

(13) 「増補 大日本地名辞書第二巻 上方」（富山房）「殖槻寺址」の項参照。

(14) 福山敏男『奈良朝寺院の研究』（蘇芸舎）。

(15) 福山敏男 前掲書。

(16) 黒沢幸三「薬師寺をめぐる景戒の動向」（日本雷異記研究会編『日本雷異記の世界』所収 三弥井書店）。